

子どもの社会的行動における親の社会的情報処理

大池明日美*・首藤 敏元**

本研究は幼児期の子どもを持つ母親131名と父親39名を対象に子どもの社会的逸脱行動に対する親の社会的情報処理について質問紙調査を行った。質問紙は社会的領域理論の社会的領域に基づいて6つの場面を設定した。質問項目は社会的情報処理モデルのステップに対応して作成した。子どもの社会的行動の特徴に応じて、親の判断が異なると仮説を立てた。調査の結果、子どもの行動や状況に応じて親の解釈や判断、子どもへの関わり方は異なっていることが示された。母親と父親は各場面に応じて関連する領域を考え、さらに、その他の領域を含めて多元的に考えようとしていた。これらの結果は、社会的領域理論と社会的情報処理モデルの統合の観点から考察された。

キーワード：社会的領域理論、社会的情報処理モデル、親子関係、道徳的判断

I 問題と目的

子どもの社会性の発達には親や周囲の人との関わりの中で形成される。子どもと親は他者や周囲の環境に関わりながら、さまざまな状況に直面する。人間は、他者との関係の中で、状況を判断し、自己を調整しながら、行動を決定していくことがしばしば求められる。このように、対人関係の中では、他者との相互作用を通して、意思決定が行われる(中田、2000)。乳幼児がいる親は子どもが直面している状況と周囲の環境に配慮しながら、状況に応じて子どもに関わろうとする。この行動は一般的に「しつけ」と呼ばれている。親の考えと子どもの欲求や考えが一致しないとき、葛藤が生じる。

人が他者と関わったり、ある状況に直面し反応するまでの認知的な過程を提案したものが社会的情報処理モデル(Dodge, 1986; Crick &

Dodge, 1994)である。社会的情報処理モデルは他者の行動や周囲の環境を適切に解釈することで、適切な反応や行動を行うことができると提案された。社会的情報処理モデルによると、人がある状況や他者の行動に直面し、反応するまでの過程は6つのステップを経る。その6つのステップは、1.符号化、2.解釈、3.目標の明確化、4.反応の検索、5.反応決定、6.実行である。6つのステップを経ることで、状況に応じた適切な反応を行うことができると考える。

状況を判断したり解釈したりするとき、他者を傷つけているか、人としてしてはいけない行動であるかといった普遍的な道徳観念を考慮したり、周囲の文化によって決められた規範などに照らし合わせながら判断したり行動を決定しようとする。Turiel (1983)は社会的領域理論を提唱した。人の判断や志向性を作り出す社会的領域は道徳領域(moral domain)、慣習領域(conventional domain)、個人領域(personal domain)の3つの領域がある。この領域に基づ

* 秋津幼稚園

** 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

いて人は状況を判断したり根拠を説明しながら自分の行動を決定しようとする。

Arsenio & Lemeraise (2004)によると、攻撃的な行動や逸脱行動を判断するとき、社会的情報処理モデルと社会的領域理論は統合可能であると述べている。Arsenio & Lemeraise (2004)は社会的情報処理モデルと領域理論を統合することによって、より柔軟で適切な反応をすることができると論じている。

本研究は社会的領域理論 (Turiel, 1983) と社会的情報処理モデル (Dodge, 1986; Crick & Dodge, 1994) に基づき、親が子どもの行動に直面し、反応するまでに行なわれる解釈や判断について検討した。親は子どものさまざまな行動に直面したとき、子どもの行動や状況に応じて状況を判断し子どもに関わろうとすると仮説を立てた。

本研究は子どもの行動と子どもが直面している状況を親はどのように状況を判断し子どもに関わろうとするのか明らかにすることを目的とした。

II 方法

1 調査の協力者

埼玉県の私立幼稚園・保育所に在園する子どもの母親195名、父親53名の計248名が調査に協力した。

2 質問紙の構成

質問紙は6つの場面から構成した。6つの場面は木登り場面、すべり台場面、挨拶をしない場面、仲間入り拒否場面、悪口場面、食事中に行儀が悪い場面であった。6つ場面と理由はTurielの社会的領域理論と対応して作った。

木登りの場面は「個人に関する場面」と設定した。個人に関する場面とは、自分の行為が自分自身に影響があるかどうかという内容である。木登り場面は木から落ちて子どもが怪我をするのでないかという内容になっており「自分自身

への危険行為」が含まれている。

すべり台場面と悪口場面は「道徳に関する場面」と設定した。挨拶をしない場面と食事中に行儀が悪い場面は「慣習に関する場面」と設定した。仲間入り拒否場面は仲間に入れてもらえなかった子どもが傷つくならば道徳に関連があり、みんなで仲良く遊ばないといけないならば、慣習に関連がある。他児を仲間に入れてなかったことを見ていた子どもたちに「仲間はすれにする子」と思われ自分自身が損するならば、自己に関連がある。このように、仲間入り拒否場面は「道徳、慣習、個人が複雑に関わっている場面」と設定した。

6つの場面は話になっており、話に出てくる登場人物(親子)は回答者自身であると仮定した。6つの場面の話しの展開は、子どもがある行為(逸脱行動)を行い、その行為に対して親は子どもに注意をしたり励ましたりするが、親の注意や励ましなどに対して子どもは嫌がるという内容であった。子どもが嫌がったとき、親は各場面の状況をどのように判断し、子どもへの関わるのかについて質問紙を通して回答してもらった。

質問紙の項目の流れはDodgeの社会的情報処理モデルに基づいて作成した。1) 逸脱判断(二者択一)は子どもの行為の善悪判断である。これはステップ1: 符号化の過程に基づいた。2) 逸脱内容(3つから選択)は1)の理由である。これはステップ2: 手がかり解釈の過程に基づいた。3) 判断理由6種類はステップ2: 手がかり解釈の過程とステップ3: 目標の明確化に基づいた。4) 反抗する子どもへの関わり方(4つから選択)はステップ4: 反応の検索、ステップ5: 反応決定、ステップ6: 行動実行の過程に基づいた。これらの計4つの質問から構成した。

3)の6つの理由は、理由1: 人を精神的・身体的に傷つけているかどうか(道徳領域)[以降「危害」と省略]、理由2: 子どもの行為は人の道徳に外れていないかどうか(道徳領域)[以

降「道理」と省略]、理由3：周りの人に迷惑をかけていないかどうか（慣習領域）[以降「迷惑」と省略]、理由4：マナーを守っているかどうか（慣習領域）[以降「マナー」と省略]、理由5：子どもの行為が後に自分自身の不利益になって戻ってこないかどうか（自己管理）[以降「不利益」と省略]、理由6：対人関係の中で悪

い評判がおきないかどうか（自己管理）[以降「悪い評判」と省略]であり、6つの場面に合わせて文章化した。場面ごとに6つのすべての理由について当てはまる程度を「強く考えた」、「考えた」、「少し考えた」、「考えなかった」の4段階で評価してもらった。

表1 場面と質問紙の内容

<p>[すべり台場面]</p> <p>あきこちゃんは公園のすべり台で遊んでいます。あきこちゃんは早くすべり台を滑りたかったので、「早く。」と言って前にいたけいこちゃんの背中を押しました。けいこちゃんはすべり台の上から下へ勢いよく滑っていきました。それを見ていたあきこちゃんの親はあきこちゃんに「危ないので、高いところから押さないで。」と言いました。あきこちゃんは「だって、けいこちゃんは遅いんだもん。早く滑りたかったの。」と言いました。</p> <p>質問1 あきこちゃんの行いに問題はありますか？</p> <p>質問2 「問題はある」と答えた方は何が問題だと思いますか？</p> <p>質問3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) けいこちゃんに怪我をさせていないかどうか 2) けいこちゃんにこわい気持ちをさせていないかどうか 3) すべり台の約束事を守っているかどうか 4) 友だちと仲良くしているかどうか 5) 自分の感情をコントロールできない人になるのではないか 6) 人から「あきこちゃんは乱暴な子ども」と言われないうか <p>質問4 あきこちゃんの親はもう一度、あきこちゃんに「背中を押してはいけません。」と言いました。しかし、あきこちゃんは親の言うことを聞きませんでした。あなたがあきこちゃんの親だったら、あきこちゃんにどのように関わりますか？</p>

3 手続き

2006年12月14～18日にアンケート調査を行った。質問紙調査を質問紙は調査者が直接母親と父親に配布し、配布した日に回収した。有効回答数は母親が131名、父親が39名の計170名であった。有効回収率は68.55%であった。

4 統計処理

統計解析にはSTATISTICA06J StatSoft JAPANを用いた。

Ⅲ 結果

1 子どもの行いに対する親の判断

母親と父親はすべり台場面、挨拶をしない場面、仲間入り拒否場面、悪口場面、食事中に行儀が悪い場面に「問題はある」と判断した。木登りの場面に「問題はない」と判断した母親と父親が多かった。「問題はある」と判断した内容に注目すると、「子どもの行いに関する問題はある」と回答した母親と父親が多かった。これらの度数と割合は表2にまとめた。

2 各場面における親の判断理由

母親と父親は場面に応じて理由が異なるかどうかみるために、2（被験者間）×6（被験者内）×6（被験者内）で分散分析を行った。場面×回答者の交互作用効果がみられた（ $F(5, 840) = 3.373, p < .01$ ）。理由×回答者の交互作用効果がみられた（ $F(5, 840) = 2.877, p < .01$ ）。場面×理由の交互作用効果がみられた（ $F(25, 4200) = 95.436, p < .01$ ）。場面×理由×回答者の交互作用効果がみられた

表2 子どもの行いに対する親の判断

		問題なし	問題あり		
			子どもの行為	親への反抗	両方
木登り	母親	89 (67.94)	25 (19.08)	9 (6.87)	8 (6.11)
	父親	24 (61.54)	5 (12.82)	7 (17.95)	3 (7.69)
		$\chi^2 (1) = 0.55$		$\chi^2 (2) = 3.95$	
すべり台	母親	1 (0.76)	115 (87.79)	0 (0.00)	15 (11.45)
	父親	0 (0.00)	29 (74.36)	0 (0.00)	10 (25.64)
		$\chi^2 (1) = 0.30$		$\chi^2 (1) = 4.73, p < .05$	
挨拶	母親	12 (9.16)	105 (80.15)	1 (0.76)	13 (9.92)
	父親	0 (0.00)	30 (76.92)	0 (0.00)	9 (23.08)
		$\chi^2 (1) = 3.84, p < .05$		$\chi^2 (2) = 3.88$	
仲間遊び	母親	13 (9.92)	110 (83.97)	0 (0.00)	8 (6.11)
	父親	1 (2.56)	30 (76.92)	1 (2.56)	7 (17.95)
		$\chi^2 (1) = 2.15$		$\chi^2 (2) = 7.81, p < .05$	
悪口	母親	0 (0.00)	111 (84.73)	0 (0.00)	20 (15.27)
	父親	0 (0.00)	31 (79.49)	0 (0.00)	8 (20.51)
		$\chi^2 (1) = 0.60$			
食事のマナー	母親	3 (2.29)	90 (68.70)	7 (5.34)	31 (23.66)
	父親	1 (2.56)	26 (66.67)	0 (0.00)	12 (30.77)
		$\chi^2 (1) = 0.01$		$\chi^2 (2) = 2.71$	

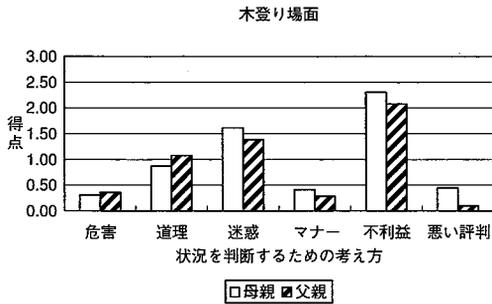
上は人数、()は%。

($F(25, 4200) = 1.745, p < .01$)。これらの結果から母親と父親は6つの場面と6つの理由の特徴に合わせて捉えており、場面に応じて理由が異なっていた。主効果が有意であったので、場面と理由について検討を行った。

(1) 木登り場面

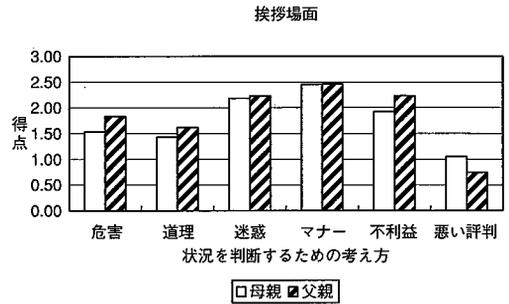
木登り場面の理由は、「不利益」について「強く考えた」と回答した母親と父親は多かった。次に、「迷惑」、「道理」、の順に「考えた」、「少

し考えた」と回答した母親と父親は多かった。「危害」、「マナー」、「悪い評判」について「考えなかった」と回答した母親と父親は多かった。場面、理由、母親と父親の多重比較を行い、5%を有意水準とした。木登り場面と理由の多重比較を行った結果、不利益 ($M = 2.2529$) > 迷惑 ($M = 1.5588$) > 道理 ($M = .91765$) > マナー ($M = .38235$)、悪い評判 ($M = .37059$)、危害 ($M = .31765$) であった。木登り場面、理



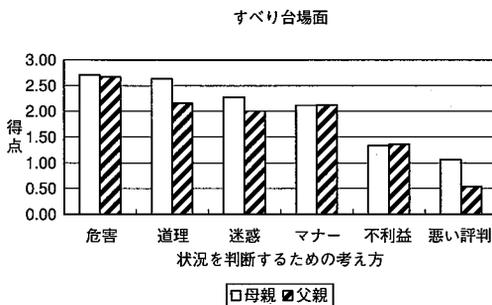
3：強く考えた、2：考えた、1：少し考えた、0：考えなかった

図1 木登りの場面における親の判断理由の平均値



3：強く考えた、2：考えた、1：少し考えた、0：考えなかった

図3 挨拶をしない場面における親の判断理由の平均値



3：強く考えた、2：考えた、1：少し考えた、0：考えなかった

図2 すべり台の場面における親の判断理由の平均値

由、母親と父親の多重比較を行った結果、母親と父親は有意な差がみられなかった。

(2) すべり台場面

すべり台場面の理由は「危害」が多く、次に「道理」、「迷惑」の順に「考えた」と回答した母親と父親は多かった。母親は「危害」が多く、次に「道理」の順に「考えた」と回答した。父親は「危害」が多く、次に「道理」、「マナー」の順に「考えた」と回答した。

すべり台場面と理由の多重比較を行った結果、危害 ($M=2.6941$)、道理 ($M=2.5235$) > 迷惑 ($M=2.2118$)、マナー ($M=2.1176$) > 不利益 ($M=1.3412$) > 悪い評判 ($M=.94118$) であった。すべり台場面、理由、母親と父親の多重比較を行った結果、母親と父親は有意な差がみられなかった。

(3) 挨拶をしない場面

挨拶をしない場面の理由は「マナー」が多く、次に「迷惑」、「不利益」の順に「考えた」と回答した母親と父親は多かった。母親は「マナー」が最も多く、次に「迷惑」、「不利益」の順に「考えた」と回答した。父親は「マナー」が最も多く、次に「迷惑」、「不利益」、「危害」の順に「考えた」、「少し考えた」と回答した。「悪い評判」について「考えなかった」と回答した母親と父親は多かった。

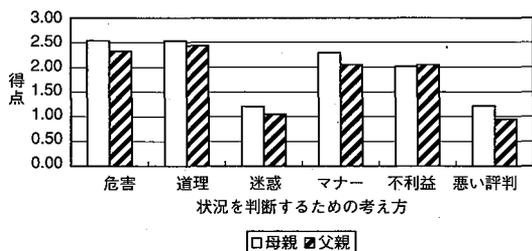
挨拶をしない場面と理由の多重比較を行った結果、マナー ($M=2.4588$)、迷惑 ($M=2.1941$)、不利益 ($M=1.9941$) > 危害 ($M=1.6000$)、道理 ($M=1.4706$) > 悪い評判 ($M=.98235$) であった。挨拶をしない場面、理由、母親と父親の多重比較を行った結果、母親と父親は有意な差がみられなかった。

(4) 仲間入れ拒否場面

仲間入れ拒否場面の理由は「道理」、「危害」、「マナー」の順に「考えた」と回答した母親と父親が多かった。母親は「危害」が最も多く、次に「道理」、「マナー」の順に「考えた」と回答した。父親は「道理」が多く、次に「危害」、「マナー」、「不利益」の順に「考えた」と回答した父親が多かった。「迷惑」、「悪い評判」は「考えなかった」と回答した母親と父親が多かった。

仲間入れ拒否場面と理由の多重比較を行った

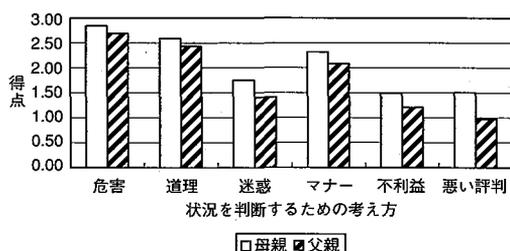
仲間入れ拒否場面



3: 強く考えた, 2: 考えた, 1: 少し考えた, 0: 考えなかった

図4 仲間入れ拒否場面における親の判断理由の平均値

悪口場面



3: 強く考えた, 2: 考えた, 1: 少し考えた, 0: 考えなかった

図5 悪口場面における親の判断理由の平均値

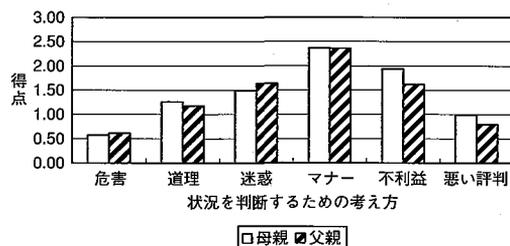
結果、道理 ($M = 2.5118$)、危害 ($M = 2.4941$)、マナー ($M = 2.2353$) > 不利益 ($M = 2.0235$) > 迷惑 ($M = 1.1706$)、悪い評判 ($M = 1.1529$) であった。仲間入れ拒否場面、理由、母親と父親の多重比較を行った結果、母親と父親は有意な差がみられなかった。

(5) 悪口場面

悪口場面の理由は、「危害」が多く、次に「道理」、「マナー」の順に「考えた」と回答した母親と父親が多かった。「迷惑」について、「考えた」と回答した母親と父親は多かった。「マナー」について母親は「強く考えた」と回答した人が多く、父親は「考えた」と回答した人が多かった。母親は「不利益」について「考えなかった」、「少し考えた」、「考えた」、「強く考えた」というように各回答に分かれた。父親は「不利益」について「少し考えた」、「考えなかった」という回答が多かった。「悪い評判」について母親は「少し考えた」という回答が多く、父親は「考えなかった」という回答が多かった。

悪口場面と理由の多重比較を行った結果、危害 ($M = 2.8059$)、道理 ($M = 2.5529$)、マナー ($M = 2.2588$) > 迷惑 ($M = 1.6706$) > 不利益 ($M = 1.4235$)、悪い評判 ($M = 1.3824$) であった。悪口場面、理由、母親と父親の多重比較を行った結果、母親と父親は有意な差がみられなかった。

食事中に行儀が悪い場面



3: 強く考えた, 2: 考えた, 1: 少し考えた, 0: 考えなかった

図6 食事中に行儀が悪い場面における親の判断理由の平均値

(6) 食事中に行儀が悪い場面

食事中に行儀が悪い場面の理由は、「マナー」が多く、次に「不利益」、「迷惑」の順に「考えた」と回答した母親と父親が多かった。母親は「マナー」について「強く考えた」と回答した母親は多く、次に「不利益」、「迷惑」の順に「考えた」、「強く考えた」、「少し考えた」と回答した母親が多かった。父親は「マナー」について「考えた」と回答した父親は多く、「迷惑」、「不利益」の順に「考えた」、「少し考えた」と回答した父親が多かった。「悪い評判」について母親は「考えなかった」と回答した人が多かったが、父親は「少し考えた」と回答した人が多かった。「道理」については母親も父親も「少し考えた」と回答した人が多かった。「危害」について母親も父親も「考えなかった」と回答した

人が多かった。

食事中的のマナー場面と理由の多重比較を行った結果、マナー ($M = 2.3647$) > 不利益 ($M = 1.8588$) > 迷惑 ($M = 1.5294$) > 道理 ($M = 1.2412$) > 悪い評判 ($M = .94706$) > 危害 ($M = .58824$) であった。食事中的のマナー場面、理由、母親と父親の多重比較を行った結果、母親と父親は有意な差がみられなかった。

3 親の関わり方

親の関わり方は、木登り場面、すべり台場面、悪口場面、食事中的に行儀が悪い場面は、「理由を話しいきかせる」が多く、次に「もう一度注意する」、「言うことをきかせる」、「あきらめる」の順であった。すべり台場面と悪口場面は「あきらめる」と回答した母親と父親はいなかった。表3に親の関わり方についてまとめた。

全体的に母親も父親も同じ傾向があったが、

表3 親のかかわり方

		あきらめる	もう一度注意する	理由を話しいきかせる	言うことをきかせる
1. 木登り	母親	5 (3.82)	37 (28.24)	86 (65.65)	3 (2.29)
	父親	1 (2.56)	10 (25.64)	27 (69.23)	1 (2.56)
$\chi^2 (3) = 0.27$					
2. すべり台	母親	0 (0.00)	6 (4.58)	92 (70.23)	33 (25.19)
	父親	0 (0.00)	2 (5.13)	19 (48.72)	18 (46.15)
$\chi^2 (2) = 6.55, p < .05$					
3. 挨拶	母親	3 (2.29)	25 (19.08)	96 (73.28)	7 (5.34)
	父親	0 (0.00)	5 (12.82)	25 (64.10)	9 (23.08)
$\chi^2 (3) = 11.96, p < .01$					
4. 仲間に入れない	母親	1 (0.76)	22 (16.79)	95 (72.52)	13 (9.92)
	父親	0 (0.00)	5 (12.82)	24 (61.54)	10 (25.64)
$\chi^2 (3) = 6.60$					
5. 悪口	母親	0 (0.00)	6 (4.58)	92 (70.23)	33 (25.19)
	父親	0 (0.00)	2 (5.13)	22 (56.41)	15 (38.46)
$\chi^2 (2) = 2.75$					
6. 食事中的のマナー	母親	2 (1.53)	19 (14.50)	90 (68.70)	20 (15.27)
	父親	0 (0.00)	6 (15.38)	23 (58.97)	10 (25.64)
$\chi^2 (3) = 2.87$					

上は人数、()は%。

母親と父親の若干の差は以下のところであった。挨拶場面と仲間遊び場面は「理由を話しいきかせる」と回答した母親と父親が多かった。次に母親は「もう一度注意する」、「言うことをきかせる」の順に回答した。父親は「言うことをきかせる」、「もう一度注意する」の順に回答した。挨拶場面と仲間遊び場面は母親よりも父親の方が積極的に関わろうとする様子がみられた。

親のかかわり方について χ^2 検定を行った。その結果、すべり台場面における親のかかわり方には有意な差がみられた($\chi^2(2)=6.55, p<.05$)。挨拶場面における親の関わり方には有意な差が認められた($\chi^2(3)=11.96, p<.01$)。

IV 考察

子どもの社会性の発達には親の関わり方に影響があるのではないかと考え、幼児期の子どもがいる母親と父親を対象に子どもの社会的行動における親の社会的情報処理について調査した。

本研究は、子どもの逸脱行動の種類に応じて、親の認知的処理のプロセスに違いがあると仮説を立てた。調査の結果、子どもの行動や状況によって親の解釈や判断、子どもへの関わり方は異なっていた。したがって仮説は支持されたと考えられる。

本研究で取り上げた場面と理由は対応する形にした。自己への危害の場面と設定したのを例にあげると、親の回答は自分への危害を考えながらも周りへの迷惑も考える親の姿がみられた。このように、親は子どもの逸脱行動を多角的に解釈しながら、子どもに関わることが示された。

社会的領域理論によると人は物事や状況を判断するとき、道徳、慣習、自己の観点から判断すると考えられている。本研究の調査によると、母親と父親は各場面に応じて関連する領域を考え、さらに、その他の領域を含めて多角的に考えようとした結果が得られた。親は子どもの社会的行動を理解する際、領域調整をしながら解釈しようとする傾向がみられることが示唆され

た。

本研究で提示した場面は、木登り場面以外は「問題はある」という回答が多かった。猪野・高橋・寺津・星野(2000)は幼児をもつ両親の養育態度を明らかにするために、幼児によく見られる親を困らせる場面に出会ったときにどのような態度をするのか調査した。その結果、場面によっては親の状況も分かってほしいという親の心情もあったが、全般的には父親も母親も子どもの心を受け入れようとする態度を示していた。本研究の木登り場面について「問題はない」と回答した背景には、母親も父親も子どもの心を受け入れようとする気持ちが反映されたからではないかと考えられる。その他に考えられることは、親にとって子どもが木登りすることは「遊び」として捉え、子ども自身への危険行為に直接関係すると考えにくい場面であったのかもしれない。

子どもへの関わり方でもっとも回答が多かったものは「理由を話しいきかせる」であった。子どもに関わる時、注意するだけでなく、なぜしてはいけないのかという理由を話し、子どもにも理解してもらおうように関わろうとする親の考えがみられた。古市(2002)は幼児と幼児の母親を対象に日常生活における母子の要求や欲求が衝突する場面を提示して調査を行った。その結果、母親は「何らかの理由があるから子どもの行動を変化させたい」と考えるが、幼児は「母親がどういう結論を出すか」ということを先に頭に浮かぶ傾向があることを報告した。古市(2002)が述べているように理由があるから子どもの行動を変化させようとする母親の行動と本研究の親の関わり方は一致しているといえる。

親の関わり方について母親と父親はすべり台場面と挨拶場面以外は同じ傾向がみられた。挨拶場面は母親よりも父親の方が積極的に関わろうとする様子が見られた。吉森(1983)によると、父親的役割対子ども役割に関して父親は社会人としての義務と責任の遂行=生き方を教え

る役割があると述べている。つまり、父親は母親よりも社会での規範意識が強く、それが子どもへの関わりに反映されているのではないかと考えられる。一方、母親は「もう一度注意する」と回答した背景は、子ども自身の気持ちや子どもの自主性を尊重して考慮したので、それらが子どもへのかかわりに反映されているのではないかと考えられる。

本研究は質問紙で親の回答を求めたので、回答に限界があったと思われる。親の判断や解釈はもっと柔軟性があり、多様な解釈と反応の仕方があると思われる。今後はさらに親の判断や解釈の背景や、多様な反応について調査する必要があると考える。

文 献

- Asher, S.R. & Coie, J.D. (1990) Peer rejection in childhood. *Cambridge University Press*. (山崎晃・中澤潤監訳 (1996) 子どもの仲間の心理学—友だちを拒否するところ—, 北大路書房.)
- Arsenio, W. F., & Lemerise, E.A. (2004) Aggression and moral development: Integrating social information processing and moral domain models. *Child Development*, Vol.75, No.4, (pp.987-1002)
- 明田芳久・一前春子・三本哲也・大谷保和. (2001) 児童の仲間関係における意図帰属と対人行動: Dodgeの社会的情報処理モデルによる検討. 上智大学心理学年報 第25巻, 11-26.
- Bowlby, J. (1988) *A Secure Base: Clinical Applications of Attachment Theory*. London: Tavistock / Routledge. (二木武監訳 (1993) ボウルビー 母と子のアタッチメント. 医歯薬出版株式会社.) p.33-34.
- Crick, N. R & Dodge, K. A., (1994) A Review and Reformulation of Social Information-Processing Mechanisms in Children's Social Adjustment. *Psychological Bulletin*. Vol.115, No.1, 74-101.
- Dodge, K. A. (1986) A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.) *Minnesota symposia on child psychology*, Vol.18, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. (pp.75-127)
- Dodge, K. A., & Rabiner, D. L. (2004) Returning to roots: On social information processing and moral development. *Child Development*, Vol.75, No.4 p.1003-1008.
- Dodge, K. A., & Price, J. M. (1994) On the relation between social information processing and socially competent behavior in early school-aged children. *Child Development*, 65, 1385-1397.
- Dodge, K. A., & Somberg, D. R. (1987) Hostile attributional biases among aggressive boys are exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, 58, 213-224.
- 呉美喜. (2001) 幼児の社会化と仲間関係—幼児期の社会的コンピテンスの発達—. *アジア文化研究*, (8), 266-277.
- 濱口佳和. (2004) 挑発場面における児童の社会的コンピテンス. 風間書房.
- 長谷川真里. (2006) 児童心理学の進歩 2章 道徳的判断と推論. 金子書房.
- 畠山美穂. (2003) 幼児の仲間受容と社会的情報処理能力の関係. *幼年教育研究年報*, 25, 35-40.
- 古市真智子. (2002) 幼児期における母親に対する認知—母親の自己認知とのズレ—. *保育学研究*, 40, 1, 54-61.
- 猪野郁子・高橋巧・寺津千賀・星野泉. (2000) 幼児をもつ両親の養育態度. *島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)* 34, 55-59.
- 井上健司・久保ゆかり編. (1997) 子どもの社会的発達. 東京大学出版会.
- 木村玲比奈・藤崎真知代. (2000) 幼児の社会的適応と社会的情報処理過程. *群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編*, 49, 339-356.
- 小石寛文. (1995) 人間関係の発達心理学 3 児童期の人間関係. 培風館.
- Laupa, M. & Turiel, E. (1995) Chapter 17 Social Domain Theory. In W.M. Kurtines. & J. L. Gewirtz. (Eds.), *Moral Development: An Introduction*. Florida: Allyn and Bacon. (pp.455-473)
- 中澤潤. (1996) 社会的行動における認知的制御の発

- 達. 多賀出版.
- 二宮克美・繁多進編. (1995) たくましい社会性を育てる. 有斐閣.
- 内田伸子編. (2005) 心理学—こころの不思議を解き明かす—. 光生館.
- 中島義明. (2006) コンパクト新心理学ライブラリー 13 情報処理心理学—情報と人間の関わりの認知心理学—. サイエンス社.
- Nucci, L. (2004) Finding commonalities: social information processing and domain theory in the study of aggression. *Child Development*, Vol.75, No.4, p.1009-1012.
- 岡隆. (2004) 社会的認知研究のパーспекティブ心と社会のインターフェイス. 倍風館.
- 佐藤眞子. (1999) 人間関係の発達心理学 2 乳幼児期の人間関係. 培風館.
- 澤田瑞也編. (1995) 人間関係の発達心理学 1 人間関係の生涯発達. 培風館.
- Shantz, C. U. (1987) Conflicts between children. *Child Development*, 58, 283-305.
- 首藤敏元. (2008) 心理学を教育実践に活かす⑥ 道徳性の心理学. 指導と評価2008年1月号, p.46-49.
- 首藤敏元・二宮克美. (2000) 子どもの社会道徳的判断における大人の権威の受容, 拒否と自己決定. 平成9年度～平成11年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, p.54-62, 112-125.
- Smetana, J. G. & Killen, M. (1999) Social interactions in preschool classrooms and the development of young children's conceptions of the personal. *Child Development*, Vol.70, No.2, p.486-501.
- 高野隆一. (1992) 第11章 社会的認知. p.159. 繁多進・青柳肇・田島信元・矢澤圭介(編者) 社会性の発達心理学.
- Tisak M.S., Tisak J., Goldstein S.E., (2006) Chapter22 Aggression, delinquency, and morality: A social-cognitive perspective. In M. Killen. & J.G., Smetana. (Eds.), *Handbook of moral development*. London: Lawrence Erlbaum Associates. p.611-629.
- Turiel, E. & Wainryb, C. (2000) Social life in cultures: Judgments, Conflict, and Subversion. *Child Development*, Vol.71, No.1, p.250-256.
- VandenBos, G.R. (Eds) (2006) *APA dictionary of psychology*. American Psychological Association. Washington, DC.p.865.
- 山崎勝之・島井哲志編. (2002) 攻撃性の行動科学—発達・教育編—. ナカニシヤ出版.
- 矢野喜夫・落合正行. (1994) 新心理学ライブラリー 5 発達心理学への招待 人間発達の全体像をさぐる. サイエンス社.
- Yau, J. & Smetana, Judith.G. (2003) Conceptions of Moral, Social-Conventional and personal events among Chinese Preschoolers in Hong Kong. *Child Development*, 74, 3, p.647-658.
- 吉本護. (2005) 第14章 家庭における人間関係. 人間関係の心理学ハンディブック. 北大路書房. p.133.

(2008年3月31日提出)

(2008年4月25日受理)